

# 古代のろう者は救済の対象であった

## 光明皇后の施薬院・悲田院

聖武天皇の妻で光明皇后が730年（天平二年）、奈良市の興福寺あたりに施薬院・悲田院を建て、飢えている者、孤児、貧窮者、盲、聾啞などを収容し、薬を与えたり、治療したりしたのであった。

『扶桑略記』には「天平二（730年）、悲田施薬両院で飢えていたり病にある者を養う」と書かれてある。

『続日本記』には天平二（730年）四月辛未（十七日）、「始めて、后宫職に施薬院を置きたまふ。諸国をして職封・ならびに大臣家の封戸の庸物を以て価に充て草薬を買ひ取りて、毎年之を進らしめたまふ。」とある。しかし、それ以前の養老七（723年）にも興福寺に施薬院・悲田院が建てられていたことを示す記録がある。同じく『扶桑略記』には養老七（723年）に「この年に興福寺内に「施薬院・悲田院」を建てる。封戸五十戸と伊与国の水田百町、越前国の稻十三万束を施入した」と記録されている。

『興福寺流記』『山階流記』に「北に悲田門がある。前四町には病に苦しんだり、孤独の人々を住まわせ、ねぎらった。」と記されている。

その場所は興福寺の北門のことで、現在の文化会館、或いはNHK奈良放送局付近にあったといわれているという。当時の聾者はおそらく、捨てられたであろうから、孤独で生活について行けなかったのであろう。

施薬院（せやくいん）は奈良時代から貧窮の病人に施薬、治療をした施設で、悲田院とは古代の貧窮者、孤児の救済施設である。

## 行基の悲田事業

733年（天平5）大僧正行基が摂津国の河辺北条武庫東条の地（兵庫県伊丹市）に昆陽寺を建て、「聾盲痾疽（唾）孤独卑賤」を収容し、保護した。その記録が『昆陽寺鐘銘』に記されている。内容は「只毎年勤修七十二度之神事仏事、為大上天皇御祈所、以所院家地利所与、為聾盲痾疽孤独卑賤也、」である。又、古今畧聞集の巻第二に「行基菩薩昆陽寺を建立の事」という題で昆陽寺のことが書かれてある。それによると、行基は大変、慈善家であったという。病者に食べ物を与えたり、温泉につれてあげたりして、やがて昆陽寺を建てたのであった。

光明皇后・・・701年760年 奈良時代、聖武天皇の皇后。藤原不比等の娘。仏教を厚く信じ、天皇に国分寺、東大寺の建立を勧めた。

行基・・・668年749年 奈良時代の高僧。道昭・義淵（ぎえん）らに法相学を学び、のち民間布教に努力し、池溝・道橋・布施屋を設けるなどの社会事業を行った。行基菩薩として崇敬された。（日本史辞典、昇龍堂出版）

## 参照

学苑（生活美学紀要655号）七月号昭和女子大学 近代文化研究所（月田みづえ）

古今畧聞集（巻第二）岩波書店

光明皇后（吉川弘文館 林陸朗著）

興福寺流記、山階流記（興福寺資料）

日本名僧論集第一巻行基、鑑真（吉川弘文館）